

平成22年4月30日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：平成19年度～平成21年度
課題番号：19720172
研究課題名（和文） 戦国期における禅宗語録史料の基礎的研究
研究課題名（英文） A Fundamental study of three collections of personal phrases of the Zen sect in the Sengoku Period

研究代表者

伊藤 幸司（ITO KOJI）
山口県立大学・国際文化学部・准教授
研究者番号：30364128

研究成果の概要（和文）：

本研究では、戦国時代における日本の外交を中心とする政治・経済・文化の活動に主導的な活躍を見せた、臨済宗幻住派の語録史料の翻刻とその研究をおこなった。対象とした禅僧は、湖心碩鼎（こしんせきてい）・嘯岳鼎虎（しょうがくていこ）・景轍玄蘇（けいてつげんそ）の3名であり、彼らの語録史料『三脚稿』（さんきゃくこう）・『頤賢録』（いけんろく）・『嘯岳録』（しょうがくろく）・『仙巢稿』（せんそうこう）を翻刻した。

研究成果の概要（英文）：

This research endeavors to reprint and consider the writings of three Zen priests of the Rinzai Genju-ha sect during the Sengoku Period, Koshin Sekitei, Shogaku Teiko, and Keitetsu Genso. The titles of the historical materials presented are the Sankyakuko, the Ikenroku, the Shogakuroku, and the Sensoko.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	570,000	3,470,000

研究分野：日本史

科研費の分科・細目：

キーワード：戦国期の語録・臨済宗幻住派・湖心碩鼎・嘯岳鼎虎・景轍玄蘇

1. 研究開始当初の背景

本研究で対象とする禅宗語録史料は、日本

人によって書かれた物でありながら、従来は禅宗史研究者が教学の立場から活用することはあっても、それ以外の研究者によって積極的に使用されることは稀であった。語録史料が、非常に特殊で難解な漢詩文によって構成されているため、その読解が敬遠されてきたからである。しかし、語録史料は政治・経済・文化・外交など諸分野に跨る豊富な情報が埋蔵される重要史料であり、学際的研究に資する史料群ともいえる。近年、対外関係史分野において語録史料が積極的に取り上げられるようになったことで、この類の史料の活用範囲も徐々に広がった結果、「史料としての語録」の存在もようやく幅広く認知されつつある。申請者も、拙著『中世日本の外交と禅宗』（吉川弘文館、2002年）において、語録史料を駆使することで中世外交と禅僧の関わり方に新たな知見を提示することに成功した。

ところで、近年、活用頻度が高まり、脚光を浴びつつある語録史料であるが、その活用史料の多くは禅宗史研究者である上村観光（『五山文学全集』全5巻、思文閣出版、1973年復刻）と玉村竹二（『五山文学新集』全8巻、東京大学出版会、1967～1981年）によって翻刻・刊行された五山文学史料の範疇に留まっている。五山文学史料は、鎌倉・南北朝・室町期（いわゆる15世紀以前）の日本史を考察する上で非常に有益であり、その主要部は上村・玉村両氏によって公開されたといつてよい。しかし、両氏による翻刻は五山文学が京都で隆盛を誇った室町期以前を対象としており、戦国期（15世紀末～16世紀）の語録史料については全く触れられていない。これは、禅宗史分野において、五山文学の水準は戦国期以降衰退し、その文学的価値が低下したと評価されてきたため、長らく研究の俎上にすら挙げられなかったからである。ゆ

えに、戦国期の語録史料を対象とした翻刻や刊行は全く行われていないのが現状といえる。このように、戦国期の語録史料は文学的価値を見出されず等閑視されてきた訳であるが、一方、文学以外の面、例えば政治・経済・宗教・地域文化・外交などの諸点から見つめ直した場合、非常に豊かな情報を我々に与えてくれる。文学的には、伝統や文体を踏襲するのみでオリジナル性を喪失したかも知れないが、漢詩文が作成され交歓される「場」からは様々な人的・物的ネットワークや時代の特徴を読み取ることが可能である。また、戦国期の禅僧の活躍は京都以外の諸地域でこそ活発であったことを考慮すれば、彼らの残した語録史料には文献史料の少ない諸地域の情報さえ発見することができる。

このように、本研究で対象とする戦国期の語録史料の史料的ポテンシャルは非常に高い。ゆえに、当該史料について基礎的考察を踏まえた上で、早急に史料翻刻を行って公表し学界共有の財産とすることは、歴史学研究の幅を広げる意味で非常に重要である。また、③で後述するように、戦国期の語録史料の活用範囲が他分野にも及ぶことも十分予想されることを考慮すれば、学際的研究を遂行・促進する上でも、本研究の作業は必要不可欠だといえる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、従来、その重要性にもかかわらず等閑視されてきた戦国期の禅宗語録史料全体の基礎的考察を行った上で、特に重要と想定される幻住派禅僧の語録史料を総合的に分析することにある。

3. 研究の方法

戦国期の日本社会は、臨濟宗幻住派という特定勢力によって禅宗界が席卷され、幻住派

禅僧が日本の政治・経済・文化・外交などの諸分野で活躍した時代であった。ゆえに、戦国期の語録史料の基礎的考察としてまず第1に取り上げるべきは、これら幻住派禅僧の残した語録史料といえる。本研究では、幻住派禅僧のなかでも特に顕著な活動を展開し、かつ当該期の日本社会へも多大な影響力を及ぼしたと考えられる3人の禅僧、湖心碩鼎・嘯岳鼎虎・景轍玄蘇の語録史料を集中的に考察する。現在、申請者が把握している3人の語録史料は、湖心碩鼎『三脚稿』『頤賢録』、嘯岳鼎虎『嘯岳録』、景轍玄蘇『仙巢稿』である。本研究では、これら4種類の語録に関して次のような行程で考察を進めた。

- (1) 各語録の諸本を博捜する。
- (2) 各語録史料を全文翻刻する。その際、フルテキストデータベース化も行う。
- (3) 語録に描かれた時代背景について考察する。

4. 研究成果

本研究における研究成果を年度ごとに区分けして示す。

(1) 2007年度

本年度は、戦国期の語録史料を概観する作業と、戦国期に幻住派隆盛の端緒を築いたとも言える湖心碩鼎の語録『三脚稿』と『頤賢録』の研究を進めた。

『三脚稿』のデータベース作成については、丹波高源寺所蔵写本（東京大学日本史学研究室所蔵写真版）の写真紙焼きを底本としつつ、『続群書類従』本を参照しつつ行った。『頤賢録』についても、同様にデータベース化を進め、『三脚稿』と同じく丹波高源寺所蔵写本（東京大学日本史学研究室所蔵写真版）の写真紙焼きを底本としつつ、写真的見にくい箇所などは、東京大学史料編纂所架蔵写本の紙焼きを参照しつつ入力を行った。デ

ータベースは、まず全文入力を基本とし、後日、検索などがし易いように工夫することを考えている。

なお、幻住派僧と密接な関わりを有する周防大内氏や中世都市博多の研究も遂行した。特に、大内氏の系譜認識や幻住派の拠点とも言える中世都市博多で展開する寺社、対東アジア貿易のあり方を概観した。

また、湖心碩鼎につづく幻住派僧である嘯岳鼎虎ゆかりの寺院山口洞春寺の所蔵史料の閲覧も行った。洞春寺には、嘯岳鼎虎が豊臣秀吉による朝鮮侵攻に従軍した際に持ち帰ったと思われる朝鮮本が多く伝来している。現在、これらの諸本は山口市教育委員会に寄託されており、同委員会の協力を得て嘯岳鼎虎手沢本朝鮮本の原本史料調査を行った。

(2) 2008年度

本年度は、嘯岳鼎虎の語録分析を中心に研究を行った。

山口には、嘯岳鼎虎と関わりの深い禅寺として洞春寺がある。洞春寺には、嘯岳鼎虎ゆかりの史料群が伝来しており、彼の伝記を把握するためにも洞春寺の資料調査を実施した。調査は、山口市教育委員会と関わりのある大内氏歴史文化研究会と共同の形態で行った。調査では、洞春寺文書（特に嘯岳鼎虎宛の公帖類）のほか嘯岳鼎虎の頂相も確認することが出来た。同時に、ご住職のご厚意により、1931年に洞春寺で和装本の形態で限定的に刊行された『洞春開山嘯岳鼎虎禅師語録』の残部を頂くことができた。本語録は、本研究で調査対象としている丹波高源寺本を底本として復刻した貴重な書籍であり、本研究の校訂作業上、非常に有用な資料となる。

上記の資料調査を参考としつつ、本研究では嘯岳鼎虎の語録『嘯岳録』のテキストデー

データベース化とその校訂を行った。

また、戦国期の他の語録と比較するために、当該期の語録の内、桂庵玄樹の語録『嶋隠集』（東京大学史料編纂所本）の紙焼きを入手することで、戦国期の語録の研究の深化を図った。当該語録は、既に一部が『続群書類従』で活字化されているものの、相当の異同があるため、相互に活用していく必要がある。戦国期に幻住派が活躍した前段階の九州地域の禅宗界を把握する上でも非常に有用な資料であることが分かった。

また、幻住派を活用した大名大内氏の外交活動に関する研究も行うことで、幻住派禅僧が活動する歴史的背景を追究することが出来た。

（3）2009年度

本年度は、まず景轍玄蘇の語録分析を中心に研究をおこなった。

景轍玄蘇の語録『仙巢稿』には、数種類の版本・写本が存在するが、ここでは国立国会図書館に所蔵される『仙巢稿』版本を底本として、テキストデータベース化をおこなった。

また、昨年度までの研究でおこなったの湖心碩鼎の『三脚稿』と『頤賢録』、嘯岳鼎虎の『嘯岳録』の各種語録のテキストデータの再チェックをおこなった。

さらに、昨年度に引き続き、山口市教育委員会（大内氏歴史文化研究会）と合同で、嘯岳鼎虎ゆかりの山口洞春寺の史料調査をおこなった。

研究論文としては、平安末から蒙古襲来、そして柳川一件までの「長い中世の外交状況」という視角から、東アジア通交圏の外交活動にかかわる禅僧の役割を考察し、そのなかで戦国期の外交僧を多く輩出した臨済宗幻住派僧を歴史的に位置づける「外交と禅僧—東アジア通交圏における禅僧の役割—」を

発表した。

あわせて、幻住派が重点的に展開した九州地域の禅宗の歴史を概観した「中世九州・琉球の禅宗世界」も発表した。

以上の作業をもって「戦国期における禅宗語録史料の基礎的研究」における当初の目的を達成したと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計8件）

①伊藤幸司、中世九州・琉球の禅宗世界、査読無、京都妙心寺展、九州国立博物館、2010、pp28-31

②伊藤幸司、外交と禅僧、査読無、中国—社会と文化—、24、2009、pp41-70

③伊藤幸司、九州の禅寺と妙心寺派、査読無、臨済会報、234、2009、pp3-6

④伊藤幸司、書評と紹介・橋本雄著『中世日本の国際関係』、査読無、日本歴史、727、2008、pp114-116

⑤伊藤幸司、偽大内殿使考、査読有、日本歴史、731、2009、pp16-34

⑥伊藤幸司、中世西国諸氏の系譜認識、査読無、境界のアイデンティティ、岩田書院、2008、pp107-148

⑦伊藤幸司、日明・日朝・日琉貿易、査読無、中世都市博多を掘る、海鳥社、2008、pp82-97

⑧伊藤幸司、博多の寺社、査読無、中世都市博多を掘る、海鳥社、2008、pp224-233

〔学会発表〕（計1件）

①伊藤幸司、禅僧と外交、中国社会科学学会、2008/7/6、東京大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 幸司 (ITO KOJI)

山口県立大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：30364128